



明日の空へ

JAL CSR REPORT vol.28
より良い社会を繋げるために、私たちができること。

私たちが大切に考える4つの分野 日本と世界を結ぶ 安全・安心 次世代育成 環境



震災から5年目、一歩ずつ前へ 東北コットンプロジェクト

東北コットン
TOHOKU
COTTON
PROJECT

東日本大震災から4年余りが過ぎ、さまざまな形で復興が進んでいます。東北で綿花を育てる3カ所の栽培地も、それぞれの目標に向かって歩み続けています。今年もたくさんの願いを込めて、種まきが行われました。

文/宮川真紀 撮影/中野幸英



写真右/畑に一列に並んで、ロープの印のところに種をまいていきます。左/綿の種は、繊維にしっかりと包まれています。

示す印のついたロープの両端を持って畑を移動。テキパキと作業が進められました。4年前に「JALエコジェット」の機体に東北コットンロゴステッカーを貼る作業をした、JALエンジニアリング・楠根秀樹は「今回、初めて来ました。仕事の意味を考えるきっかけになりました」と話します。種まきは東京、山形から修学旅行で訪れる高校生も手伝ってくれるとのこと。多くの人が、東北の綿花を応援しています。

01. この日の宮城県は最高気温が30度を超え、真夏のような暑さでした。02. 「ここはみなさんの綿畑です。いつでも遊びに来てください」と、農場の赤坂さん。03. 一列まいたら、一歩進んで次の畝へ。種をまきながら一体感も生まれます。

東北コットンプロジェクトに関する詳細は、下記のウェブサイトをご覧ください。
www.tohokucotton.com/

今年もやります！ JAL お仕事インタビューの日

～中学・高校生の将来の夢や希望を育むお手伝い～

航空会社の仕事に興味をもつ中学・高校生を対象として、今年で開催3年目となる「JAL お仕事インタビューの日」を、この夏休みも実施します。JALグループの第一線で活躍するパイロット、キャビンアテンダント、整備士、グラウンドスタッフが、その仕事に就いたきっかけや職務の内容、やりがいなど、仕事に関するご質問に直接お答えします。昨年の参加者からは「これまでインターネットからしか情報が得られなかったが、初めて直接話を聞くことができ、夢が少し身近に感じられた」「実際に働いている人の話を聞いたことで、自分ももっと頑張る夢をかなえようという活力と自信に繋がった」などの感想をいただいています。将来、航空会社で働いてみたいと考える皆さまのご参加をお待ちしています。



開催日時：①2015年8月5日(水) 14:30～17:30
②2015年8月20日(木) 14:30～17:30
開催場所：JAL メインテナンスセンター1 東京モノレール「新整備場駅」下車
募集人数：各回最大100名様(お申し込み多数の場合は抽選)

なお、当イベントへのご参加は、中学・高校生ご本人のみとさせていただきます。お申し込みの詳細は、www.jal.com/ja/csr/interview/ をご参照ください。



綿花栽培をきっかけに 農業の復興再生へ

津波被害を受けた農地で綿花を栽培し、農業の復興再生を目指す「東北コットンプロジェクト」。震災直後に種をまいてから、丸4年が経ちました。この間、仙台市の荒浜、名取市、東松島市の3カ所の栽培地で毎年綿花を育て、採れたコットンでたくさんの製品が生まれました。5回目の種まきを迎え、東北の農地はそれぞれが前に向かって進んでいます。

荒浜では綿花をきっかけに「荒浜アグリパートナーズ」という会社を立ち上げ、地域の農業再生に向けて活動しています。今年は約40ヘクタールに米と大豆を作付けし、畑やビニールハウスでの野菜栽培を計画しています。社員も増え、味噌、漬物などの加工品製造も目指し、農業再生が着々と進んでいます。代表の渡邊静男さんは「荒浜の農業復興を目指し、今は本業である米、大豆に力を入れ、再開のきっかけとなった綿花は小規模ながら、絶やさないことと続けていければと思っています」と話します。津波ですべてが流され、何もなかった場所は、今では美しく整備された田畑が広がっています。綿花は復興のシンボルとして、荒浜の地で咲き続けていくことでしょう。

名取市の「耕合アグリサービス」は、昨年は前年の2倍近い量を収穫することができました。気温の低い東北でも

綿花が育つことを実証してくれました。綿摘みの作業も増えたことで、今年は収穫のボランティアを募集することも計画しているそうです。

多くの人が集まる 癒しの場所に

綿花の種まきは、栽培が始まって以来の恒例行事です。今年プロジェクトに参加したのは、東松島農場です。「5年目を迎えました、あの津波から」。作業の前、「イーストファームみやぎ」代表・赤坂芳則さんのあいさつは、こんな言葉から始まりました。東松島市は石巻に次ぐ大きな被害を受けたこと、農場の先には東日本大震災最大級の仮設住宅があり、当初3年で出られるといわれていたが、いまだ行き先が決まらない人たちもいることなど、現地状況を話していただきました。

綿畑の隣には、近隣の栽培グループが手掛けるラベンダー畑があり、夏、秋には綿とラベンダー両方の花が咲く予定です。「ここを被災者の癒しの場所にしたい」、東松島農場はそんな思いで進められています。

今年の綿畑は約80アール、ビニールハウス300坪でも栽培する計画です。念入りに準備したという畑は、朝耕したばかりで土はふかふか。お天気もよく、まさに種まき日和でした。ペテランのメンバーたちが率先して準備し、種を紙コップに分け、種をまく位置を